モノ（*mono*，物）的過去與現在

モノをめぐる過去と現在
The Material Culture of Ainu in the Past and Present

文・圖 | 山崎 幸治 YAMASAKI Koji
（北海道大學愛努・先住民研究中心副教授）

譯者 | 陳由瑋（政治大學民族學系博士生）

文責・図 | 山崎 幸治 YAMASAKI Koji
（北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 准教授）

訳者 | 陳由瑋（政治大学民族学学科博士生）

2013年から始まった「イランカラﾌﾟテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。（出典：「イラ ンカラプテ」キャンペーン推進協議会 http://www.irankarapte.com/）

2013年迄今產官學合作舉辦的irankarapte活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。（圖片來源:「イランカラﾌﾟテ」キャンペーン推進協議 http://www.irankarapte.com/）

人類の歴史はモノとともにある。人類は常に自らを取り囲む環境から働きかけられ、モノを作り出し、また、その作り出したモノを使って環境へ働きかけてきた。ここでいう環境には、自然環境に限らず、社会的な環境も含まれる。また、作り出されたモノも人類へ働きかけてきた。よって、人類が作り出したモノ（物質文化）を研究することは、人類文化を考える際の有効なアプローチとなる。本稿では、アイヌのモノ（物質文化）に着目してみたい。

人類的歷史與モノ（*mono*，物[1]）共伴。從古至今，人類經常受自身所處環境的施為影響，因而製作モノ（*mono*，物）。又將所製作出來的モノ（*mono*，物），施加於環境上。在此所談論的環境，不拘限於自然環境，也包含社會性環境。此外，製作出的モノ（*mono*，物），也會影響到人類。以此推論，研究人類製作出來的モノ（*mono*，物）（物質文化），可為思考人類文化時的有效管道。本稿觀點則聚焦於愛努族的モノ（*mono*，物）（物質文化）。

1 譯者註：日語平假名的「もの」，在中文可翻譯成「物」、「物質」、「物品」、「東西」等字義。用片假名標記的「モノ」，除了有前述字義外，在博物館領域使用「モノ」此字時，意思等同於英文的「object」，指的是收藏品性質的「物件」。因作者在文章中的「モノ」因非單一「物件」之義，故以統一附註羅馬字「mono」，保留作者透過「モノ」表達多個概念的用意。

その土地に育まれる

アイヌの伝統的な居住地域は、現在の、東北地方北部、北海道、千島列島、樺太島（サハリン島）南部であることが、これまでの先行研究により明らかとなっている。よって、まずアイヌのモノは、これらの地域で生み出されたことを確認しておくことが重要である。なぜなら、その土地で生まれた文化には、その土地で長年育まれた歴史と知恵が内在しているからである。例えば、樹木の内皮繊維を織った布から仕立てられる衣服や、魚

孕育於斯土

愛努族的傳統居住地域為現在的東北地方北部、北海道、千島列島、樺太島（庫頁島）南部，這事我們已經從文獻回顧中可以得知。因此，首先重要的就是，先確認愛努族的モノ（*mono*，物），是在上述這些區域中製作出來這件事。這是為什麼呢？是因為生長在該片土地的文化，包含著該地長年孕育出的歷史與智慧。舉例來說，用樹木內皮纖維織成的布料所製成的衣服、魚皮製的鞋子，要孕育出這些東西，都是少不了土地這個環境。同時，歷史上

オヒョウという樹木の内皮繊維を織った布から仕立てられる衣服。北海道ではアットゥシと呼ばれることが多い。（北海道大学植物園・博物館所蔵）

用裂葉榆這種樹木內皮纖維織成的布料所製成的衣服。在北海道常稱為アットゥシ。（北海道大學植物園・博物館典）〈譯者註：アットゥシattus，愛努語「木皮衣」〉

テープ状にした絹布の配置や配色に、作り手のセンスが光る。1938年、北海道の虻田にて収集。（北海道大学植物園・博物館所蔵）

帶狀的絹布配置與配色，反映出製作者不凡的品味。1938年於北海道虻田收集。（北海道大學植物園・博物館典）

サケ皮製の靴。上部は海獣皮、縁は木綿。1879年、樺太（サハリン）にて収集。（北海道大学植物園・博物館所蔵）

鮭魚皮製的鞋子。上半部為海獸皮，邊緣為木棉。1879年於樺太（庫頁島）收集。（北海道大學植物園・博物館典）

皮製の靴は、この土地の環境なくしては生み出されなかった。同時に、アイヌは和人を含めた周辺諸民族との活発な交易を歴史的に展開してきた。そこで得られたモノは、アイヌ文化のなかで再解釈され、自らの文化の文脈のなかに位置づけられた。アイヌのモノには、交易等で入手した木綿などを素材とするモノが多く存在するが、その使われ方や製作技術、そのモノが持つ文化的意味には何らかのアレンジが加えられており、その土地ならではの文化となっているのである。そこにはアイヌ文化内の地域性も存在する。

アイヌのモノ（物質文化）を考えることは、その土地とそこで展開された歴史を考えることにつながっているのである。

愛努族與和人（大和民族）等周邊各民族，從以前就展開熱絡的交易。愛努族透過交易所獲得的モノ（*mono*，物），在愛努文化中被重新詮釋，於自己文化的文脈中被定位。愛努族的モノ（*mono*，物）之中，有許多素材是從交易等方式取得，例如木棉等素材，然而該モノ（*mono*，物）的使用方法或製作技術，該モノ（*mono*，物）所具有的文化性意涵中，被加入某部分的調整編改，因此將該モノ（*mono*，物）轉化成該地特有的文化。這部分也存在著愛努文化的地域性。

所以，思考愛努族的モノ（*mono*，物）（物質文化）與思考該地與該地所展開的歷史這兩件事，是彼此相互關聯的。

海外アイヌ・コレクション

物質文化研究では、そのモノを「いつ、どこで、だれが」集めたのかという情報が極めて重要である。しかし残念なことに、日本国内には、このような情報が付されているアイヌのモノは多くない。その理由は複数想定されているが、ひとつの理由として、日本国内の博物館には「いつ、どこで、だれが」といった情報を重視しない骨董屋などから購入したモノが多いことが指摘されている。このような状況を打破するのが、海外の博物館に

國外愛努典藏

物質文化研究中，該モノ（*mono*，物）是「何時、何地、由誰」所收集的資訊非常重要。但讓人惋惜的是，日本國內有很多愛努族的モノ（*mono*，物）是沒有上述的資訊。我們可設想出數個理由，其中一個理由指出，日本國內的博物館有很多モノ（*mono*，物），是從不重視「何時、何地、由誰」的古董店那裡收購而來的。打破上述情形的是，國外博物館所施藏愛努族的モノ（*mono*，物）。被稱為「國外愛努典藏」，西歐、俄羅斯、美國等地目前

おもな海外アイヌ・コレクションに関する報告書や展示図録。1980年代から約25年間にわたり国際的な共同調査がおこなわれた。（筆者撮影）

主要為國外愛努典藏相關報告書與展示圖錄。從1980年代開始，進行約25年的國際性共同調查。（圖片提供：山崎 幸治 YAMASAKI Koji 拍攝）

所蔵されているアイヌのモノである。これらは「海外アイヌ・コレクション」と呼ばれ、西ヨーロッパ、ロシア、アメリカなどに約13,500点が確認されている。それらには「いつ、どこで、だれが」といった情報が付されていることが多い。現在、アイヌの物質文化研究では、日本国内だけではなく海外のコレクションにも目を配ることが常識となっている。海外アイヌ・コレクションの里帰り展も開催されるようになった。

近年の動向

近年、民族学博物館などに収蔵・展示されているモノを、民族文化を理解するための資料としてだけではなく、それを制作した個人の「作品」として位置づけ直そうという世界的潮流がある。アイヌも例外ではなく、とりわけ現在に生きる人々が作り出したモノは、一人の作家の「作品」としてあつかわれることが多くなっている。また、文化復興やアイデンティティの再活性化、地域振興、観光などの文化資源として着目されることも多くなっている。

筆者が注目している状況としては、博物館に収蔵されているアイヌのモノに、現在に生きるアイヌ、とりわけモノづくりに携わっている人々が関心を持ちはじめていることである。これまで博物館という施設は、もっぱら研究者が利用してきた。しかし近年、研究者ではない先住民にも自らの祖先が作り出したモノと「再会」する場として認識されつつあるのである。博物館側も、大阪の国立民族学博物館を筆頭に、これまで分断されがちであった博物館と先住民コミュニティと間の障壁を取り払い、両者の互恵的な関係を模索するプロジェクトがスタートしている。

已確認出的モノ（*mono*，物）約有13,500件。這些很多都有「何時、何地、由誰」的資訊。現在，愛努的物質文化研究界中，研究者不只要注意日本國內，也需要關注國外典藏這件事已為常識。因此，日本國內也開始舉辦國外愛努典藏的歸鄉展覽。

近年動向

近年民族學博物館所收藏、展示的モノ（*mono*，物），不僅作為理解民族文化的材料，也將其物件重新定位為製作者個人的「作品」，這種做法可謂是世界性的潮流。愛努族也不例外，特別是當代者所製作出的モノ（*mono*，物），有很多情況是被看待成一位作家的「作品」。另外，很多情況則作為文化復興或自我認同的再活化、地區振興、觀光等文化資源。

筆者目前所著眼的狀況是，當代的愛努族，特別是從事モノ（*mono*，物）製作的人，他們開始關注博物館所藏的愛努族的モノ（*mono*，物）這件事。一直以來，所謂博物館這類設施，使用者主要為研究者。然而，近年來對博物館的認識，已經出現為非研究員的原住民與自己祖先所作的モノ（*mono*，物）「再会（*sai kai*，重逢）」場所的認知。於是，博物館當局由大阪民族學博物館領頭，開始展開專案計畫，將過去常被分隔開來的博物館與原住民社群，除去彼此之間的隔閡，並摸索找尋兩者之間的互惠關係。

2013年、「二風谷イタ」と「二風谷アットゥシ」が、北海道で初めて経済産業省の伝統的工芸品に指定された。貝澤守氏制作の「二風谷イタ」（盆）、貝澤雪子氏制作の「二風谷アットゥシ」（樹皮繊維の布）。（筆者撮影）

2013年，「二風谷イタ」與「二風谷アットゥシ」於北海道首次指定為經濟產業省的傳統性工藝品。貝澤守氏所製作的「二風谷イタ」（盆）（譯者註：「イタ ita，愛努語「盆」）、貝澤雪子氏所製作的「二風谷アットゥシ」（樹皮纖維的布）。〈譯者註：アットゥシattus，愛努語「木皮衣」〉（圖片提供：山﨑幸治 YAMASAKI Koji 拍攝）

モノを通じた伝承

博物館が、現在に生きる先住民と祖先が作り出したモノの「再会」の場になりつつあることは先に指摘したが、そこで試みられる実践には世界的にパラレルな状況が認められる。そのひとつが、現在の作り手が、博物館に所蔵されている祖先のモノを熟覧調査し、

藉モノ（*mono*，物）傳承

博物館成為當代原住民與祖先所做モノ（*mono*，物）「再会（*sai kai*，重逢）」的場所這件事，我們已經在前文提過。在此認知下所嘗試的實踐活動，已經是獲得全球公認的情況。其中一項實踐是當代手作家，熟覽調查祖先典藏於博物館裡的モノ（*mono*，物），盡可能做出相近的東西。愛努族將這種實踐稱做「複製」。語意等同於台灣的「重製」一詞。於是，當代手作家揣摩祖先的作品進行複製（重製）這件事，讓當代手作家體驗到自己與祖先雙手動作交疊合一，也包含感受追憶當時祖先的想法。

博物館裡有些モノ（*mono*，物）是透過失傳已久的技術所製作而成的，藉由複製（重

それとできる限り近いものを作ろうとする実践である。アイヌではこの実践を「複製」と呼んでいる。これは台湾における「重製」とほぼ同義である。そこでは、現在の作り手が祖先の作品に肉薄して複製（重製）をおこなうことで、現在の作り手と祖先の手の動きが重なり合い、当時に祖先の思いも含めて追体験される。

博物館には、伝承が途絶えてしまった技術によって作られたモノも存在するが、複製（重製）を通じて、失われた技術が復活することがある。祖先の技術や知恵に感動するなかで、内面化されていた差別意識を乗り越えることもある。経年劣化が進む博物館資料の修復技術者の育成も期待できる。

複製（重製）とは、モノを通じた伝承活動なのである。アイヌと台湾原住民に止まらず、これらの類似する実践を世界規模で比較検討することは、それぞれの民族文化の復興のあり方を鍛え上げることにもなるだろう。

アイヌ工芸作家による熟覧調査の様子。北海道博物館にて。
（筆者撮影）

愛努工藝家仔細觀覽調查的情況，於北海道博物館。
（圖片提供：山崎 幸治 YAMASAKI Koji 拍攝）

製）可讓失傳的技術復活。原住民除了感動於祖先的技術與智慧之外，也能突破自己內心已經內化的歧視意識。也可期望培育修復技術人員，修復經年累月劣化的博物館資料。

所謂的「複製（重製）」，是透過モノ（*mono*，物）的傳承活動。不局限於愛努族與台灣原住民，以全球規模比較檢討上述類似實踐方式，筆者相信應該可開發轉化成各民族文化復興的方法。

おわりに

日本では、2020年に「民族共生象徴空間」がオープンする予定である。急速に変化する環境のなかで、アイヌのモノをめぐる新たな課題も生まれてくると思われる。そのなかでアイヌの主体性をいかに担保していくのか、この土地の歴史と知恵を内在した物質文化を、いかにして未来へつなげていくのか。グローバルかつローカルな視座から考えていく必要があるだろう。◆

注）本稿および掲載写真は、JSPS科研費JP17320142 、JP15K20826 の成果の一部である。

結語

日本預定於2020年開放「民族共生象徵空間」。在此急速變化的環境之中，相信會產生出愛努族的モノ（*mono*，物）有關的新課題。在此之中如何去保證愛努族的主體性，如何讓物質文化所內含的土地歷史與智慧與未來連結，我認為應該有必要從全球化兼具在地化的視角進行思考。◆

注）本稿與刊登照片為JSPS科研費JP17320142、JP15K20826的部分成果。

作者簡介｜プロフィル

山崎 幸治 YAMASAKI Koji
北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 准教授
Associate Professor, Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies

福岡県生まれ。専門は、文化人類学。海外アイヌ・コレクション調査のなかで文化人類学およびアイヌ文化について学ぶ。現在、博物館資料の現代的意義とその活用に関心を持ち、アイヌ物質文化および博物館に関する研究をおこなっている。

著書に、山崎幸治・伊藤敦規・城石梨奈（編）『アイヌ・アートが担う新たな役割―米国先住民アートショーに学ぶ』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（2015年）、山崎幸治・伊藤敦規（編著）『世界のなかのアイヌ･アート』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター（2012年）、山崎幸治・加藤克・天野哲也（編）『teetasinrit tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料―受けつぐ技―』札幌：北海道大学総合博物館・北海道大学アイヌ・先住民研究センター(2009年)などがある。

山崎 幸治 YAMASAKI Koji
北海道大學愛努・先住民研究中心副教授
Associate Professor, Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies

出生於福岡縣。專長為文化人類學。學習國外愛努典藏調查中的文化人類學與愛努族文化。現在關注於博物館資料的當代性意義與其活用，目前從事愛努族物質文化以及博物館相關研究。

著作有，山崎幸治 伊藤敦規 城石梨奈(編)《愛努族藝術所當任的新角色 向美國原住民藝術展學習》札幌：北海道大學愛努族 先住民研究中心（2015年）、山崎幸治 伊藤敦規（編著）《世界之中的愛努藝術》札幌：北海道大學愛努族 先住民研究中心（2012年）、山崎幸治 加藤克加天野哲也(編)『teetasinrit tekrukoci 先人的手拓 北大所藏愛努族資料 傳承的技術 』札幌：北海道大學總和博物館 北海道大學愛努 先住民研究中心(2009年)等書。